



幼児期の遊びを通じた学びとは
—幼保小の接続を考える—

名古屋学芸大学 津金美智子

本日の内容

- 中央教育審議会 初等中等教育分科会
幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会
令和5年2月27日 報告書 について

[幼保小の架け橋プログラム：文部科学省
\(mext.go.jp\)](https://www.mext.go.jp)

- 遊びを通して学ぶ幼児の言動の深い理解
- 遊びの重要性の発信





∅ 中央教育審議会 初等中等教育分科会
幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会
令和5年2月27日 報告書 について

[幼保小の架け橋プログラム：文部科学省\(mext.go.jp\)](https://www.mext.go.jp)

学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について

～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～

抜粋

学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～ (mext.go.jp)

教育は、教育基本法や関係法令が掲げる目的及び目標の達成を目指し、その連続性・一貫性を確保しながら、組織的・体系的に行うことが重要である。

幼児教育と小学校教育には、他の学校段階等間の接続に比して、子供の発達の段階に起因する、教育課程の構成原理や指導方法等の様々な違いが存在する。

5歳児：遊びを中心として、頭も心も体も動かして様々な対象と直接関わっていく時期

児童期：学ぶということについての意識があり、集中する時間とそうでない時間の区別が付き、自分の課題の解決に向けて、計画的に学んでいく時期

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、幼児教育施設は、小学校以降の教育を見通しながらその基盤となる資質・能力を育成していくこと、小学校は、幼児教育施設で育まれた資質・能力を踏まえて、教育活動を実施すること。

学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について
～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～

中央教育審議会 「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」（令和 3年1月26日）

「個別最適な学び」と「協働的な学び」との一体的な充実

（参考）「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実（イメージ）：文部科学省 (mext.go.jp)

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善等の取組

↓
幼児教育施設においては、このような小学校以降の学校教育における授業改善等やそれらを通じて育まれる資質・能力を見通し、遊びを通して学ぶ幼児教育の特性を踏まえつつ、その充実に取り組むことが求められている。

その際、幼児教育では、従来から一人一人に応じた指導や一人一人のよさを生かした子供同士の関わりを重視しており、そのような子供の活動を通して協同性を育てていることの意義についても再確認をしながら、幼児教育の充実を図っていくことが重要である。

小学校においては、幼児教育施設において「主体的・対話的で深い学び」、「個別最適な学び」、「協働的な学び」に向けた資質・能力の芽生えを培っていることを踏まえ、その芽生えを更に伸ばしていくべく、幼児教育の成果を生かした教育活動に取り組むことが求められている。

学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について

～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～

5歳児から小学校1年生の2年間の「架け橋期」は、幼保小が意識的に協働して子供の発達や学びをつなぐことにより、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくることが重要である。

架け橋期の円滑な接続をより一層意識し、乳幼児期の子供それぞれの特性など発達の段階を踏まえ、一人一人の多様性や0歳から18歳の学びの連続性に配慮しつつ、教育内容や指導方法を工夫することが重要である。

特に小学校入学前後の架け橋期は、子供が幼児教育施設における遊びを通じた学びや成長を基礎として、小学校において主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことを可能にするための重要な時期である。

そのため、小学校の入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきた資質・能力が、低学年の各教科等における学習に円滑に接続するよう教育活動に取り組むことが求められる。

学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について
～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～

幼保小が協働して「期待する子供像」や「育みたい資質・能力」を明らかにするとともに、この「期待する子供像」や「育みたい資質・能力」を基にして、「園で展開される活動」や「小学校の生活科を中心とした各教科等の単元構成等」等を具体的に明確化していくことが考えられる。

その際には、幼児期の遊びを通した学びが小学校の学習にどのようにつながっているかについて、幼保小の先生が子供の姿の事例を通して、具体的に対話をすることが重要になる。

具体的な事例を用いて、大事にしている子供の経験等の対話を通じて相互理解を深めていくことが非常に重要であり、幼児期の興味や関心に基づいた多様な体験が小学校以降の学習や生活の基盤となること、ひいては言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の持続可能な社会の創り手として必要な力の育成等につながっていくことについて共通理解を図ることが求められる。

学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について
～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～

小学校入学当初は、生活科を中心としたスタートカリキュラムの編成・実施により、幼児期の生活に近い活動と児童期の学び方を織り交ぜながら、幼児期の豊かな学びと成長を踏まえて、子供が主体的に自己発揮できるような場面を意図的につくることが求められている。

小学校においては、架け橋期のカリキュラムの実効性を高めるためにも、幼児教育と小学校教育の円滑な接続において重要な役割を担うスタートカリキュラムの位置付けを再確認し、架け橋期のカリキュラムを踏まえた教育課程の編成・実施・改善を進める中で、スタートカリキュラムの充実に図ることが必要である。

架け橋期のカリキュラムにおいて明確化された資質・能力がどのように育まれたかについて、小学校1年生の修了時期を中心に幼保小が共に振り返り、架け橋期の教育目標や日々の教育活動を評価することが考えられる。また、当該評価を踏まえて、幼保小それぞれの教育の充実（各幼児教育施設・小学校の教育課程編成や指導計画作成等）につなげていくことが期待される。

学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について

～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～

架け橋期の継続的なPDCAサイクルの構築

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」等を活用しながら、具体的に話し合い、目の前の子供の
実態に応じて、架け橋期のカリキュラムの実践・改善等を行っていくことも大切。

幼児教育施設における遊びは、先生の意図的、計画的な教育であることが保護者や地域住民には
伝わりにくいいため、遊びを通した学びが小学校以降の教育の基盤につながっていくことについて、
幼保小が連携して発信することが重要である。

幼児期において、信頼する大人との温かな関係の中で、子供が自己を発揮しながら、他の子供や
地域の人々との関係を深めていくことが重要であり、幼児教育の成果が小学校教育へと引き継がれ、
子供の発達や学びが連続するようになる必要がある。そのためには、幼保小の先生が、子供がどのよう
に友達のよさや自分のよさ、可能性に気づき、人に対する信頼感や思いやりの気持ちを持てるようにな
るか、また、現在どのような課題を有しているか等について対話を行い、相互理解を深めることも大切
である。

学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について

～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～

全ての子供に格差なく学びや生活の基盤を保障していくためには、幼保小が、施設類型や学校種の違いを越えて連携・協働し、保護者や地域住民等の参画を得ながら、架け橋期の教育の充実に取り組んでいく必要がある。そのためには、幼児期に育まれた資質・能力が小学校教育にどのようなつながっているか、関係者がイメージを共有し、実践できるようにする必要があるとともに、学びや生活の基盤を育むため、幼児教育施設がどのような工夫をしているかについて理解を広げていく必要がある。

幼児期は、子供が遊びを中心として、頭も心も体も動かして、主体的に様々な対象と直接関わりながら総合的に学んでいくとともに、遊びを通して思考を巡らし、想像力を発揮し、自分の体を使って、友達と共有したり、協力したりして、様々なことを学んでいくことが重要である。このような遊びを通して学ぶという幼児期の特性は、普遍的に重視すべき視点であり、社会の変化に伴い、今まで以上に重要になってきている。

学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について

～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～

一方で、遊びを通して学ぶという幼児期の特性に関する認識が、社会的に共有されているとは言い難く、幼児教育については、いわゆる早期教育や小学校教育の前倒しと誤解されることがある。例えば、現在、令和3年答申を踏まえ、小学校以降においては1人1台端末等を日常的に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実することが求められているが、小学校以降の教育を見通すことと前倒しをすることは違うことに留意しながら、幼児教育の充実を図ることが求められている。

幼児期は身体と感覚・感性を通じた体験が必要な時期であることや、幼児教育はいわゆる早期教育や小学校教育の前倒しではなく、子供が主体的な遊びの中で試行錯誤し考えたり、先生の関わりや環境の構成を工夫したりすることにより、「主体的・対話的で深い学び」を実現していることなど、遊びを通して学ぶという幼児教育の特性について、様々な研究や実践の成果に基づく知見を活用して幅広く伝えながら、社会や小学校等と共通認識を図っていくことが重要である。

学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について
～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～

いわゆる認知能力と非認知能力は相互に関連し、支え合って育っていくと言われている。子供の体験の幅を広げ、質を深めるための関わりや環境の構成に取り組むことが求められ、その際、言語や数量等との出会い、人やものとの関わりなどの中で感じたこと等も、子供にとっては貴重な体験であるということを認識することが大切である。

遊びを通して学ぶという幼児教育の特性を踏まえ、日本語の豊かな表現に慣れ親しみ、楽しく遊びながら日本語感覚を身に付けることによって、コミュニケーション能力や自己表現する感性を育むなど、言葉を豊かにする遊びの工夫が必要である。

このことは、将来の小学校教育において、語彙量を豊かに増やしていく学びにもつながると考えられる。

学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について
～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～

幼児教育施設においては、ICTを活用したドキュメンテーションやポートフォリオといった子供主体の遊びを通した学びの記録により、日々の教育実践や子供の学びを「見える化」し、先生の教育の意図や環境の構成の工夫等を併せて伝えることにより、幼児教育の特性や教育方針等について、保護者や地域住民の理解を深めて信頼を得る取組が行われてきている。

このような取組を進め、保護者や地域住民等の幼児教育施設の運営や教育活動への理解を促進し、「社会に開かれたカリキュラム」や「社会に開かれた幼児教育施設づくり」につなげていくことが期待される。



遊びを通して学ぶ

幼児の言動の深い理解

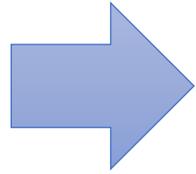
幼児教育と小学校教育
の特別委員会

幼児期の学びの特性

- 五感を通じた体験の重要性
- 「遊び」を通じ総合的に学ぶことの重要性

➤ 幼児期の子供が遊ぶとは

幼児が周囲の環境（もの、人、できごと等）に思いのまま、
多様な仕方で応答し合うことに夢中になり、
時の立つのも忘れ、その関わり合いそのものを楽しむこと



幼児が自ら興味や関心をもって環境に取り組み、
様々なことを発見し、試行錯誤を経て、
環境へのふさわしい関わり方を身に付けていく

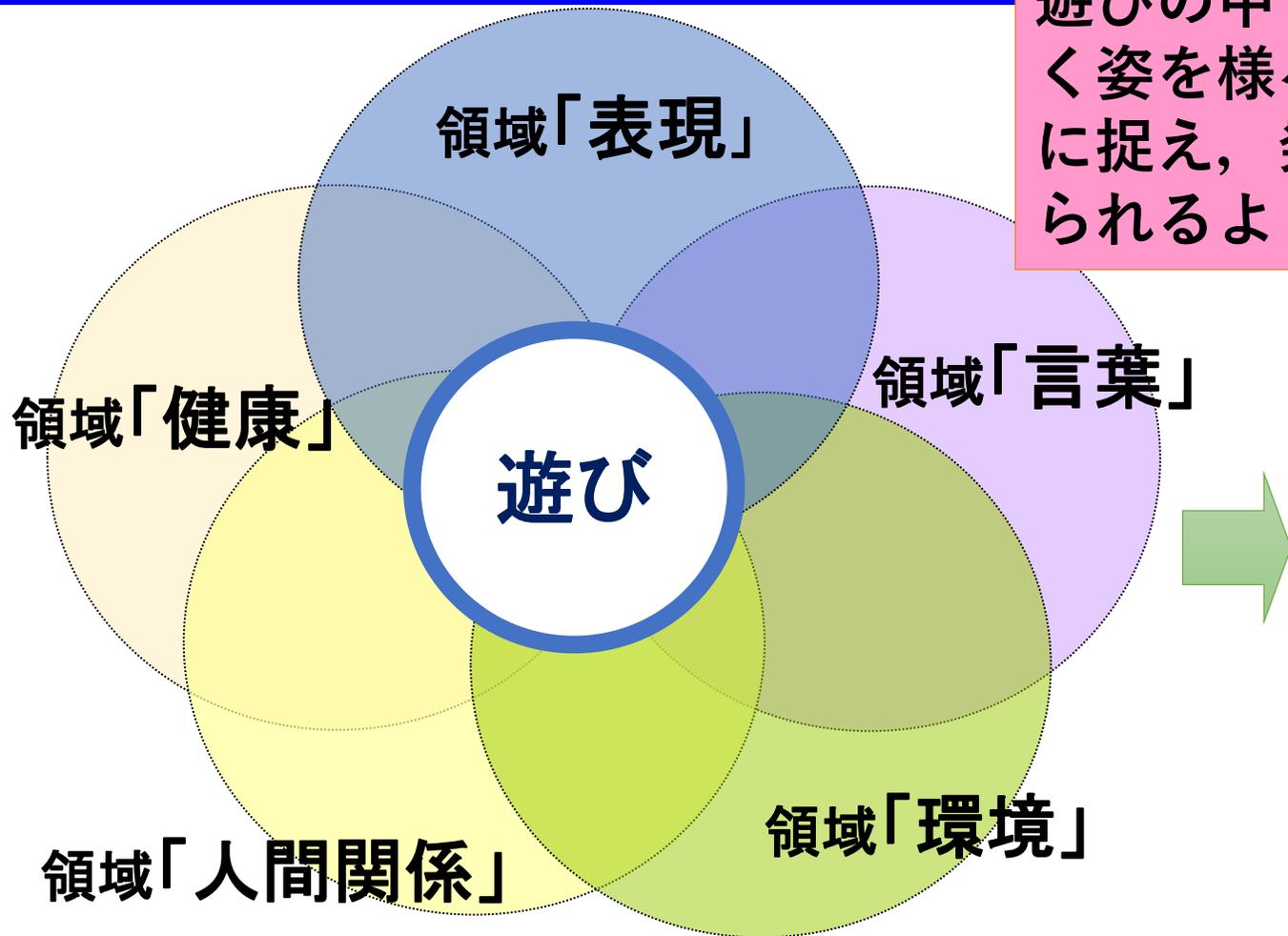
環境を通して行う教育

幼児の自発的な活動としての遊びは
心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習

幼児教育は遊びを通じた総合的な指導が中心

遊びを通して総合的に指導するとは

遊びの中で子どもが発達していく姿を様々な側面から、総合的に捉え、発達に必要な経験が得られるような状況をつくること



生きる力の基礎を育成

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿



資質・能力を育む先生や大人が、教育上の思いや願いを照らし合わせながら、一人一人の子供の様子を見定めていくことを通じて、子供の学びや生活の質を捉え、資質・能力がどのように育ってきているかを見出し、**子供の实態に沿って主体的・対話的で深い学びの充実を図れるようにするために必要な手掛かりとして活かすことができるもの**

10の姿の 読み取り方

幼稚園教育の基本を逸脱するような特別な活動の中で、
できるようにさせるのではなく、園での**遊びや生活**
を通して**総合的に指導**すること

【協同性】

友達と関わる**中で**、互いの思いや考えなどを共有し、共通の
目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、
充実感をもってやり遂げる**ようになる。**

〇〇するようになる過程が大事ということ

「〇〇するようになる」という到達目標ではない。

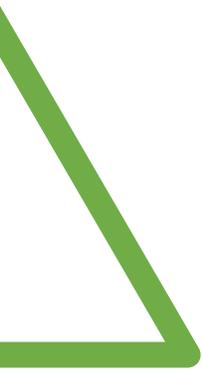
結果的に〇〇できなかったとしても**〇〇しようとする過程**
で感じたり、楽しんだり、気付いたり、考えたり、葛藤し
たり乗り越えたりする**体験が次の体験につながることを重**
視しているのが**幼児教育**



遊びを通して学ぶとは

心を動かされる体験のつながり，深まり

幼児の主体的・対話的で深い学びの過程



主体的・対話的で深い学びとは

「主体的な学び」

周囲の環境に興味や関心を持って積極的に働き掛け，見通しを持って粘り強く取り組み，自らの遊びを振り返って，期待を持ちながら，次につなぐ学び

「対話的な学び」

他者との関わりを深める中で，自分の思いや考えを表現し，伝え合ったり，考えを出し合ったり，協力したりして自らの考えを広げ深める学び

「深い学び」

直接的・具体的な体験の中で，「見方・考え方」を働かせて対象と関わって心を動かし，幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返し，生活を意味あるものとして捉える学び

「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」
平成28年12月21日 中央教育審議会

この「**主体的・対話的で深い学び**」が重視されている今だからこそ、
各幼児教育の現場では、

幼児が遊びに没頭できるような環境を通して行う教育になっているかどうか

友達との関わりを通して葛藤やつまずきをも体験し、
それらを乗り越えることができるような状況を大切にしているかどうか、
見直す必要があるのです。

そして、それらが、幼児にとって**深い学び**になっているか、
保育者自身が捉えられる**専門性**が求められているのです。

体験を豊かにするには

- 幼児一人一人の体験を理解する
- 幼児の体験に共感する
- 体験からどのような興味や関心が生じてきたのか理解し、その興味や関心を幼児が追究できるような環境の構成と適切な援助をする
- 体験から幼児が何を学んだのか理解する
- 入園から修了までの幼稚園生活の中で、ある時期の体験が後の体験にどのようにつながるのかを考える

幼児教育において育みたい資質・能力

小学校
以上



幼児教育
環境を通して行う教育

知識及び技能の基礎

豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする

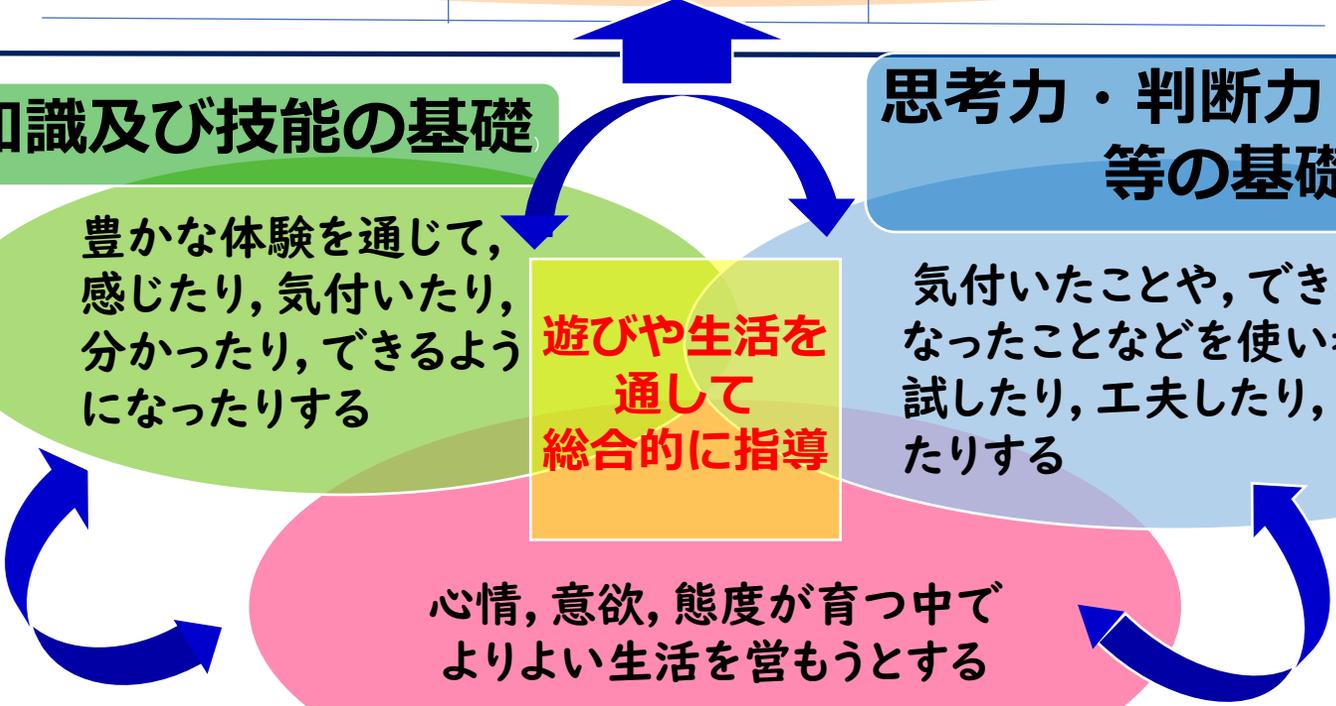
思考力・判断力・表現力等の基礎

気付いたことや、できるようになったことなどを使い考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする

遊びや生活を通して総合的に指導

心情、意欲、態度が育つ中でよりよい生活を営もうとする

学びに向かう力・人間性等



幼児教育と小学校教育との接続の記述

幼稚園教育要領

幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。

保育所保育指針

保育所保育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、第1章の4の(2)に示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、保育所保育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めること。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領

幼保連携型認定こども園の教育及び保育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼保連携型認定こども園における教育及び保育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。

小学校学習指導要領 総則

4 学校段階等間の接続

- (1) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。

・・・・・・・・・・・・・・・・ 略 ・・・・・・・・・・・・・・・・

特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。

幼児教育と小学校教育との円滑な接続に向けて

～幼児期の遊びを通した主体的・対話的で深い学びを小学校での学びにつなぐ～

幼児期から児童期へ**子どもの発達や学びは連続**しています。そのため、幼児教育と小学校教育で育成を目指す資質・能力が一貫して育まれるように、幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図る必要があります。そして、それぞれの時期の発達の特性から教育内容や方法の違いはあれども、**双方の教育において「主体的・対話的で深い学び」を重視していることは同じです。****こうした共通の視点から、子どもの発達や学びの姿への認識を深め、理解し合い、一貫した質の高い教育を目指すことが求められます。**

幼児教育は、小学校教育の先取りではなく、**幼児が主体的に遊び楽しさや面白さを感じる中で、自ら気付いたり考えたりすることなどを大切にしています。**この学びが「**幼児期の終わりまでに育ってほしい姿**」へとつながり、**この過程で育まれる資質・能力は、小学校での学習意欲や生活態度の基礎となります。**小学校学習指導要領総則には、「**入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと**」と示されています。**幼保小の教職員が、資質・能力のつながりを理解し、見通しをもって双方の教育を見直し、教育課程（全体的な計画）やそれに基づく指導計画の改善を図っていくことが望まれます。**

幼児教育と小学校教育との円滑な接続に向けて

～幼児期の遊びを通した主体的・対話的で深い学びを小学校での学びにつなぐ～

【リーフレット】

https://drive.google.com/file/d/11qkECMEssR-YhJhfMmLmc3rJ_XzY5HME/view?usp=share_link

【幼小接続資料】

https://drive.google.com/file/d/1F_pDSnZ4LlbP03UaOfpcvoBCh113YajD/view?usp=share_link

- 実践事例 (2事例)
- 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿
- 名古屋市(小学校)教育課程 生活科
スタートカリキュラムの実践例

幼児教育と小学校教育との円滑な接続に向けて

～幼児期の遊びを通した主体的・対話的で深い学びを小学校での学びにつなぐ～

事例 5歳児6月 「ありがとうのとう、とうやのとうだ」

父の日のプレゼントができあがると、幼児の

①「手紙も書きたい」という声があが

この姿を捉え、保育者は、以下のよう

学級の全ての幼児が文字を書ける発達の

「おとうさん いつもありがとう」の文字

絵、文字、自分の名前などが自由にかけ

自分で名前を書いてみたい幼児には、保育者が別の紙に文字の見本を

用意したり、分からない文字だけ代筆したりして、個々の幼児の発達の

段階、興味や関心に応じて、この手紙を活用できるようにした。

「手紙も」の「も」には、
母の日に手紙を書いたことを思い出し、
「感謝の気持ちを伝えたい」という
思いが湧き出したことから手紙を書こ
うとしていることがうかがえる。

事例 「ありがとうのとう、とうやのとう

とうやは カードに印刷された文字を拾

② 「ありがとうの『とう』、とうやの

③ 保育者が「本当だ。一緒だね」と言うと、

④ とうやは「これ見て書くと（自分の名前）間違えないね」と言う。

保育者の言葉からも、
自分の発見に確信をもち、
音が同じならば文字も同じと感じた
のだろう。

「さっさと間違えないよ」と言葉を繰

と、同じ名前のもう一人のとうやに

が、とうやの『とう』と一緒にだから、

見て書くといいよって教えてあげ

⑥ そして、もう一人のとうやを呼

く説明し、名前が書けるまでず

文字を拾い読みするなかで、偶然
その音が自分の名前の音と同じ
であることを発見し、うれしくて
たまらないようだ。

同じ名前の幼児へも関連すること
と感じ、この発見を知らせたいと
いう気持ちを強くしている。

主体的・対話的で深い学びの視点から

感謝の気持ちを伝えたいという必要感から、これまでの体験の中で出合ってきた文字を「読みたい」「書きたい」と感じ、行動に表そうとしている。

幼児の文字と出合う「学びに向かう力」の原動力

同じ音の名前の幼児の存在にも気づき、自分の発見が同じように生かせると考え、すぐに知らせたり、友達の姿を見届けたりする。

声に出して読み上げたことで、偶然、音と文字との関連性を発見し、同じ音ならば文字も同じことに気づき、文字が分かる喜びを感じている。

幼児教育において育みたい資質・能力の視点から

知識・技能

思考力・判断力・
表現力等

学びに向かう力・
人間性等

小学校
以上

知識及び技能の基礎

- ・ 拾い読みをし、音が自分の名前の音と同じであることに気付く。
- ・ 音が同じならば文字も同じと分かる。
- ・ 見て書くと間違わないで書けると感じる。
- ・ 同じ名前の幼児との関連をつかむ。

思考力・判断力・表現力等の基礎

- ・ 音が自分の名前の音と同じであることを確かめながら発見する。
- ・ 「本当だ。一緒だね」という教師の言葉から、音が同じならば文字も同じという自分の発見に確信をもつ。
- ・ 見て書くことで、間違いなく文字が書けるという見通しをもつ。

父の日のプレゼントカードに名前を書く

- ・ プレゼントをつくったことから母の日に手紙を書いたことを思い出す。
- ・ 感謝の気持ちを伝えたいという思いが湧き出す。
- ・ 自分の発見したことを同じ名前の幼児に早く知らせ、共有したいと強く感じる。
- ・ 自分の発見に自信をもっている。
- ・ 最後まで友達を見届けようとしている。

学びに向かう力・人間性等

環境を通して行う教育

幼児教育

幼児は文字の機能や役割を体験から感じ、読んだり書いたりすることに憧れ、遊びや生活に取り入れていく。鏡文字や文字らしき表記などであっても、**幼児期には、文字と出会った感動、「読んでみたい」「書きたい」気持ちを、まず、大切に受け止めていきたい。**



幼児教育で育みたい資質・能力の「知識及び技能の基礎」
における「**基礎**」に相当すること

早期教育や小学校教育
の前倒しではない。



幼児の必要感に基づいた文字への関心や感覚を豊かにすることが、
小学校において学ぶ楽しさを実感することにつながるであろう

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)

2022.3.31

03 手引き(初版) (mext.go.jp)

はじめに ～幼保小の架け橋プログラムの重要性～

子供一人一人が、将来、自分のよさや可能性を最大限に発揮し、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、ながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするためには、
幼児期の3要領・指針や小学校の学習指導要領の理念をより徹底し、
充実した教育を、「架け橋期」とそれにつながる時期、さらにその後の時期を通じて目指していくことが求められます。

幼稚園教育要領
学習指導要領
前文

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)

2022.3.31

架け橋期を通じた共通の視点(例)

例えば、子供の姿や発達に応じた以下のようなつながりを意識して、幼保小の先生が一緒に考えて具体化していく。

- 子供の姿や発達を踏まえ、遊びや学びのプロセスをどのように深めていくのか
- 園で展開される活動/小学校の生活科を中心とした各教科等の単元構成等をどのようにしていくのか
- そのため、先生の関わり、環境の構成や環境づくりとしてどのような工夫があるか

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)

2022.3.31

遊びや学びのプロセス

遊びの中での気づきが自覚的な学びへ、そして将来の探究へとつながっていく。

園における遊びを通して、幼児がどのような学び(体験)を得、深めているのか、小学校での各教科等における授業はどのように展開し児童の学びを深めているのかについて相互理解し、**幼保小の先生が架け橋期における主体的・対話的で深い学びの実現について一緒に考えていく。**

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)

2022.3.31

小学校での学習や生活を踏まえた「幼児教育の工夫」

小学校での学習や生活を見通すことが必要である。

これは、小学校教育の前倒しではなく、将来の学びにつながる幼児の体験、この体験を幼児期にふさわしい形で実現させていくこと

(最も遊びが深まるのは、幼児の主体性と先生の意図が合致したとき。つまり、活動の主体は幼児であり、先生は活動が生まれやすく、展開しやすいように意図をもって環境を構成していく)。

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版) 2022.3.31

小学校での学習や生活を踏まえた「幼児教育」

「幼児らしい生活の中で体験を通じた学び」

幼児が諸感覚を働かせ体験を通して学ぶことは、小学校以上の学習において、学習意欲や実感を伴った理解につながるほか、つまずいても理解できたときの達成感を思い出して繰り返し学んだり、学んだことを実生活の中で活用したりすることにつながる。

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)

2022.3.31

指導上の配慮事項 「先生の関わり」

子供の発達等に応じて先生の関わり方に変化はあるが、その基本的な考え方は同じである。教育の内容や方法の違いのみに着目するのではなく、そうした共通点を生かしていくことも必要である。

先生と子供の相互作用、子供同士の相互作用を生み出し、

- 子供同士の考えをつなぎ、子供とともに創造する
- 多様な子供一人一人の可能性や活躍の場を引き出す集団づくり

といった視点は共通していることを踏まえ、各施設段階での先生の関わりや役割について捉え、幼保小の先生方が一緒に考えていくことが大切である。

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)

2022.3.31

指導上の配慮事項

「教育的価値を有する教材としての環境」

- 幼児期の教育が遊びの中での学び、小学校教育が各教科等の授業を通じた学習という違いがあるものの、両者共に「人との関わり」と「ものとの関わり」という直接的・具体的な対象との関わりの中で行われることは同じである。
(例えば、幼児も児童も、人やものとの関わりを通して、対象に内包される法則性や、生命や自然に対する畏敬の念といった抽象的で高度な概念と関わり、それらを獲得していく等)

○環境の構成・環境づくりについて、**子供にとっての教育的価値の視点**からその共通性の理解を深めるとともに、子供が学びを深めていくことができる環境の在り方について協議を深め、充実を図っていくことが大切である。

○園と小学校では、施設や室内環境、時間の区切り方などが異なっていることに関する理解も必要である。

幼児期の教育は、「環境を通して行う教育」を基本としており、先生に支えられながら幼児が自分の力で生活をつくっていくことができるように環境を構成している。 小学校教育においても、児童が安心感をもち、自分の力で学校生活を送ることができるように、児童の実態を踏まえること、人間関係が豊かに広がること、学習のきっかけが生まれることなどの視点で学習環境を見直すことが大切である。



遊びの重要性の発信

学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について
～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～

幼児教育施設においては、**ICTを活用したドキュメンテーション**や**ポートフォリオ**といった子供主体の遊びを通じた学びの記録により、日々の教育実践や子供の学びを「見える化」し、先生の教育の意図や環境の構成の工夫等を併せて伝えることにより、幼児教育の特性や教育方針等について、保護者や地域住民の理解を深めて信頼を得る取組が行われてきている。

このような取組を進め、保護者や地域住民等の幼児教育施設の運営や教育活動への理解を促進し、**「社会に開かれたカリキュラム」**や**「社会に開かれた幼児教育施設づくり」**につなげていくことが期待される。

社会に開かれた教育課程(カリキュラム)の実現へ

令和4年度 愛知県幼児教育研究協議会

幼児教育における「社会に開かれたカリキュラム」の実現をめざして ～ 幼児期に育みたい資質・能力の理解に向けて ～

[451674.pdf \(pref.aichi.jp\)](#)

- **社会に開かれたカリキュラムの実現**とは、**よりよい教育を通じてよりよい社会を創るという目標を園と社会とが共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育むこと**です。よりよい教育を進めるために、その在り方について、幼児教育施設と家庭や小学校、地域とで相互理解を図り、組織的かつ計画的に教育・保育活動の質の向上に向けて力を合わせていきましょう。
- 幼児期の子供は、遊びに没頭し、興味や関心を追究していく中で様々なことを学んでいきます。**遊びを通して育っていく子供の姿を**保育者も、子供の家族も、小中学校の先生たちも、地域の人たちも、**社会のみんな**で理解するために、**子供が育つ上で大事にしたいこと、一人一人の個性や発達にふさわしい関わり方を**連携・協働して考えていきましょう。

令和4年度 愛知県幼児教育研究協議会

幼児教育における「社会に開かれたカリキュラム」の実現をめざして
～ 幼児期に育みたい資質・能力の理解に向けて ～

[451674.pdf \(pref.aichi.jp\)](#)

実践例

★ 保護者へ情報発信しよう！～ SNSや保育ドキュメンテーションを活用して～

アプリ配信や掲示写真だけでなく、保護者と保育者が直接対話して育ちを共通理解する

〈週1回程度、保育ドキュメンテーションを各クラスの保護者にWeb配信〉

〈配信した写真とコメントの一部を拡大印刷して、翌日クラス別に掲示〉

〈保護者が写真を見ているところに担任や園の職員も参加〉

〈Web配信だけでは伝えきれない具体的な姿や遊びの経過などを補足・伝達〉

★ 小学校等関係者と相互理解をすすめよう！～ 学びを日々の遊びから捉える～

保護者用の掲示や印刷物を利用して、

「遊びを通じた学び」のプロセスを小学校の先生に伝える

継続的に子供たちが熱中して取り組んだ遊びを、保育ドキュメンテーションとして保護者に配付している資料をもとに、交流会や研修の場で小学校の先生に「遊びを通じた学び」のプロセスを具体的に伝えながら「遊びは学び」であることを共通理解

幼児教育における「社会に開かれたカリキュラム」の実現をめざして
～ 幼児期に育みたい資質・能力の理解に向けて ～

実践例

[451674.pdf \(pref.aichi.jp\)](#)

★地域の関係者と子供の育ちを共有しよう！ ～竹ぽっくり作りを通して～

子供に期待する育ちを地域の人にわかりやすく伝え協働活動にする

| 子供に期待する育ち | 保育者が伝えた内容 | 地域の人が理解してくれたこと |
|----------------|--|-----------------------------------|
| やり遂げた満足感 | ちょっと難しいものに挑戦すると、できた時の喜びがより大きく感じられます。 | 簡単にできるものだけじゃない方が、楽しくなるようだ。 |
| 役に立つ喜び | 頑張ってできるようになると、うれしくて友達に教えたくなり、友達から「ありがとう」と言われたり褒められたりすると、もっと教えたくなくなります。 | 自分だけができればいいのではないんだな。 |
| 心が通じ合う つながり | 自分も頑張ったから、友達の頑張るきもちが分かり、励ましたり、自分のことのように喜び合ったりします。 | 友達と一緒に取り組んでいると、友達の気持ちが分かるようになるんだ。 |



「遊びの中でいろいろとできることが増えていくようにするんだね」

「それなら太くて低めの安定感のあるものや、ちょっと高くて難しいものもあると面白いね」
「足を置く面積が小さい物もあるといいかもしれないね」

令和4年度 愛知県幼児教育研究協議会

幼児教育における「社会に開かれたカリキュラム」の実現をめざして ～ 幼児期に育みたい資質・能力の理解に向けて ～

[451674.pdf \(pref.aichi.jp\)](#)

- 子供の育つ姿を共有することができたのは、どのような体験を通して、どのようなことを身に付けていくのか、そのプロセスで学ぶことを保育者が具体的に伝えたからです。連携の在り方まで詳細に踏み込んだ話し合いを行い、子供に期待する育ちを丁寧に伝えたことで、よりふさわしい活動になるような協力を得ることができました。
- 子供の育ちの理解を得るためには、様々な方法で、具体的に子供の育ちを伝え、それがどのように相手に伝わったのかまで意識し、確認することが大切です。
遊びを中心として、頭も心も体も動かして、主体的に様々な対象と関わりながら、総合的に学んでいく幼児期の子供について、幼児教育施設と家庭、小学校を含む地域がそれぞれのもつ機能を向上させながら連携・協力し、「社会に開かれたカリキュラム」の実現につなげていきましょう。

まとめ

遊びを
通じて学ぶ

- ◆遊びの価値の再考
- ◆遊びから深い学びの読み取り
- ◆深い学びの実現に向けた
取り組み